

## 学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者名	TRAN QUOC PHUONG (トラン・クォック・フオン)
論文題名	天台智顛における三諦三観思想の研究
<p>本論文は天台智顛（538-597）における三諦三観思想の研究を行なったものである。</p> <p>序論において、近代、日本での天台教学と智顛の三諦三観思想に関する学術的研究の歴史を概論し、さらにベトナムでの仏教全般の学術的研究及び天台教学研究の状況を概括し、本研究の目的と方法論、研究の構成と意図、及び本研究の位置を示した。日本では智顛の三諦三観思想について部分的研究は多いが、智顛の全著作を通じて三諦三観思想全体の教学体系を研究する論文は限られている。ベトナムでは越訳大蔵経は未完成であり、仏教全般の学術的研究及び天台教学の研究は未だ進展していない。三諦三観思想の研究に対するこのような現状において、本論文の研究は日越両学界において、意義と価値があると示した。</p> <p>本論の第一篇は「大乘仏教における二諦思想の形成と展開」と題し、インドの龍樹から中国隋代の智顛に至るまでの真俗二諦説のあゆみを究明した。</p> <p>第一章では龍樹の二諦説を究明し、『中論』『大智度論』を取り挙げ、両論に説かれる二諦の意義を明らかにした。龍樹が提起した二諦説は真理に関する学説（理教）と教法に関する学説（約教）の両側面を意味し、『中論』は消極的側面を、『大智度論』は積極的側面を表わしている。龍樹は諸法皆空・諸法実相を宣揚するに他ならない。</p> <p>第二章の「中国における二諦思想の受容と変遷」では、二諦思想の受容初期から天台智顛が三諦説を提起するに至るまでを魏晋時代の受容期・南北朝時代の変遷期・隋代の発展期に分け、各時期の人物・学説・特徴を究明した。魏晋時代の受容期は、道安、</p>	

鳩摩羅什、僧肇を取り挙げ、三者の二諦説の見解や特徴を究明した。この時代は格義仏教という特徴があり、三者のうち、道安は未だ格義仏教の傾向を離脱していない。鳩摩羅什は単独の著書が存在せず、その主張は不明であるが、訳経事業によれば鳩摩羅什は真俗二諦に関する術語を的確に把握し、二諦思想に精通していたと推測できる。僧肇は「有、無」を俗諦とし、「非有非無なる不真空」を第一真諦と主張している。僧肇は龍樹系般若教学の空思想を忠実に反映し理解できた。南北朝の変遷期は昭明太子を中心とする二十三家と成実学派の三大法師を取り挙げ、各自の見解や特徴を明らかにした。昭明太子等は質疑応答の形式で真俗二諦をめぐる議論を行ない、世人の所知を俗諦とし、出世人の所知を第一義諦と主張する。特に昭明太子は即有即無を俗諦とし、離有離無を真諦と主張し、真俗二諦に優劣をつけ差別的に捉えた。成実論師達は三仮を俗諦とし四忘を真諦と主張する。莊嚴寺僧旻は俗即真・真即俗と主張し、二諦不異相即説を成立させた。開善寺智蔵は俗即真・真即俗に基づき、二諦を中道と統一すると主張し、二諦即中道説を成立させた。両者は一体説に帰属する。龍光寺僧綽は空と色の真俗二諦は互いに離れることなく、空即ち色なり、色即ち空なるとして、二諦不離相即説を成立させた。この説は異体説に帰属する。成実論師の二諦説の特徴は俗諦としての三仮を提起したものである。隋代の発展期は嘉祥吉蔵と天台智顛を取り挙げ、両者の見解や特徴を明確にし、特に両者が異なる方向性に基づき、真俗二諦説を展開したことを究明した。吉蔵は龍樹系般若教学の思想を土台として四重二諦説を成立させ、智顛は『法華経』の立場から蔵通別円の化法四教によって七種二諦説を成立させた。吉蔵の四重二諦説のなかで、最高の二諦説は、有・空・非有非空・非二非不二を俗諦とし、不三、言亡慮絶を真諦と主張する。智顛の七種二諦のなかで、最高の二諦説は円教の二諦とし、幻有・幻有即空を俗諦とし、一切法有に趣き空に趣き不有不空に趣くのを真諦と主張する。智顛は真即是俗、俗即是真とする円教の二諦を不思議

の二諦と称し、真諦と俗諦とが相互に融合しあい一体となり、不二であり、その体こそが中道であるとしている。智顛は、真俗二諦は決して二のみならず、第三諦の中道も存在することを認知し、後に円教の即空即仮即中の三諦説を提唱したと考えられる。

本論の第二篇は「天台智顛における三諦三観思想の所依経論」と題し、智顛の三諦三観思想の典拠を究明した。

第一章の「『中論』の二諦説から『仁王般若経』『菩薩瓔珞本業経』の三諦説」では、その三経論を取り挙げ、それぞれ所説の二諦や三諦を考察した。『中論』自体は三諦を説かず、二諦説を説示している。観四諦品第 18「因縁所生法」の偈に関して、智顛は『法華経』の立場から蔵通別円による円融三諦説を成立させた後、円教の立場に立脚し、「因縁所生法」の偈を「因縁所生法、即空即仮即中」と読み換えたと考える。『仁王般若経』所説の三観は法仮観・受仮観・名仮観の三観であり、智顛が説く三観とは全く関係がない。『仁王般若経』所説の三諦は空諦・色諦・心諦及び世諦三昧・真諦三昧・中道第一義諦三昧である。この三諦説は智顛の蔵通別円による三諦説とは異なり、智顛が説く円融三諦の境地には到達していない。『菩薩瓔珞本業経』所説の三諦は有諦・無諦・中道第一義諦である。『菩薩瓔珞本業経』所説の三観は従仮入空観・従空入仮観・中道第一義諦観であり、智顛はこの三観説を根拠とし、三観教義の一部として構成した。

第二章の「『法華経』における三諦三観の所依」では、寿量品を手掛りに方便品を考察した。智顛の円融三諦は『法華経』を土台とし、寿量品からは三諦の由来を根拠とし、方便品からは円融三諦を根拠として円融三諦と解釈したと考える。『法華経』の立場からは円教・円妙・円満・円足・円頓による円融三諦を成立させる。『法華経』を離れば円融三諦は成り立たない。

本論の第三篇は「天台智顛における三諦三観思想の展開」と題し、智顛の生涯にわた

る著作を枢要として三諦三観思想の独自性と優越性を徹底的に究明した。

第一章の「天台智顛の前期時代著書の考察」では、『次第禪門』『法華三昧懺儀』『六妙法門』『覺意三昧』『方等三昧行法』『法界次第初門』『天台小止観』の七著作を取り挙げて考察し、各書に表わされる三諦三観を究明した。『次第禪門』『六妙法門』『天台小止観』は禪観経典として重要な位置を占め、空仮中の三観を説示するが、次第隔歴の三観にとどまる。空仮中の三諦思想は未だ教学体系を構成していないが、三観を説示する際に、三諦にも関心を寄せて、後期の三諦思想体系を大成する萌芽が見られる。

『法華三昧懺儀』『覺意三昧』『方等三昧行法』は実践法の意義をもち、『法界次第初門』は天台用語を収録したものであるが、いずれも思想的教学体系を構成するものではない。

第二章の「天台智顛の後期時代著書の考察」では、『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』の法華三大部を取り挙げ、各書に表わされる三諦三観の独自性と優越性を詳細に論述し、智顛の円熟した三諦三観の教学体系の構成内容とその特徴を究明した。

『法華文句』は智顛の法華解釈論である。本書は聴記本・整理本・丹丘添削本・天宝再治本の四段階の体裁を経て、陳の禎明元年（587）から唐の天宝七年（748）に至るまでに完備された。平井俊栄氏は、『法華文句』は吉蔵の『法華玄論』『法華義疏』を下敷きにして執筆されたと指摘しているが、本研究において、現行の『法華文句』に説示される教学思想・智顛の分科解釈・四種解釈論・三諦三観思想を究明すること及び、吉蔵の『法華玄論』『法華義疏』の内容とを比較対照し、両者の方向性と教説内容とは全く異なることを明確にした。『法華文句』に表出する分科解釈法及び四種解釈論は天台智顛が独自に創造したものである。『法華文句』所説の三諦は真俗中・空仮中の型を展開し、両型は同格同体である。有無中の三諦型の表出箇所は少なく、使用頻度も低い。蔵通別円による三諦のなかで、蔵通の二教では中道を論じていないので、真俗二諦に

止まり、三諦は成り立たない。別教では次第隔歴の三諦説を構成している。円教では円融相即一体の三諦説を構成している。円融相即一体の三諦は智顛が説く三諦教学体系であり、この円融三諦が諸法実相・真如法界・実性實際であり、これこそが世間相常住であることを明確にした。『法華文句』所説の三観は四種解釈論の観心釈によって成り立つ。智顛は『法華経』所説の一言一句を解釈する際には、その一言一句を観照の境（所観）として自己の心において空仮中であり、即空即仮即中であると観照している。これが『法華文句』の三観の特徴である。『法華文句』は天台法華学の入門書として取り扱うべきであると考えられる。

『法華玄義』は智顛の法華教理論である。本書は聴記本・整理本・修治本の三段階の体裁を経緯し、開皇 13 年（593）から仁寿二年（602）の間に、灌頂自身が修治作業を行ない校勘し成立した。智顛は開皇 13 年の夏安居に玉泉寺にて『法華玄義』の講説を行なったと考える。『法華玄義』所説の三観は空観・仮観・中観であり、『摩訶止観』所説の三観と同格同体である。別教の次第隔歴の三観と円教の不次第・円頓・円融・一心三観とがあり、円教の一心三観が、智顛が説く真意である。『法華玄義』所説の三諦は真俗中・空仮中の型があり、両者は同格同体である。智顛は別教の次第隔歴の三諦を僞法とし、円教の円融三諦を妙法と判定する。妙法三諦が、智顛の優越性かつ独自性を示す教理解釈論である。妙法三諦が、即一実諦であり、一実相印・一仏乗・常樂我淨・諸法実相・世間相常住である。天台法華学を究明する際には『法華玄義』を必読するべきである。

『摩訶止観』は智顛の法華実践論である。本書は聴記本・整理本・修治本・再治本の四段階の体裁を経て、大隋開皇 14 年（594）4 月から貞観 6 年（632）の間に成立し完備された。『摩訶止観』全十巻のなかで正修止観章は骨格であり、内容的には十境十乗観法である。十境のなかで、第一の観陰入界境が骨格であり、内容的には十乗観法で

ある。十乗観法とは観不可思議境・起慈悲心・巧安止観・破法遍・識通塞・修道品・対治助開・知次位・能安忍・無法愛である。十乗観法のなかで、第一の観不思議境を学界では重視しているが、本論文では破法遍が十乗観法の核心であると考え。『摩訶止観』所説の三止とは体真止・方便隨縁止・息無辺分別止であり、三観とは従仮入空観・従空入仮観・中道第一義諦観である。三観は別教の次第隔歴と円教の円融円頓三観とがある。別教の三観は次第の義・次第の修・次第の煩惱断滅・次第の証とする観法である。円教の空仮中の一心三観・即空即仮即中の義・修・煩惱断滅・証は、豎の空仮中の破法遍・横の空仮中の破法遍・横豎不二の空仮中の破法遍から成る。この三段のなかで、一段でも欠如すれば円融・円満・円頓・円足の妙の三観とはならない。空観とは豎の一空一切空と観照し、横の空即仮即中と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足することが、智顛が説く空観の真実義である。仮観とは豎の一仮一切仮と観照し、横の仮即空即中と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足することが、智顛が説く仮観の真実義である。中観とは豎の一中一切中と観照し、横の中即空即仮と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足することが、智顛が説く中観の真実義である。このように空仮中の三観は妙空妙仮妙中の三観であると称する。智顛は三観を実修する最高の目的は開示悟入の仏知見を顕現するためである。仏釈尊が教説した五時説からいえば法華時に至っていないと、妙空妙仮妙中とする妙観の境地に到達できないとしている。